山陰中央新報

2011年（平成23年）6月12日（日曜日）

中海は宝物

未来守（さきも）りネットワーク活動記

＜5＞

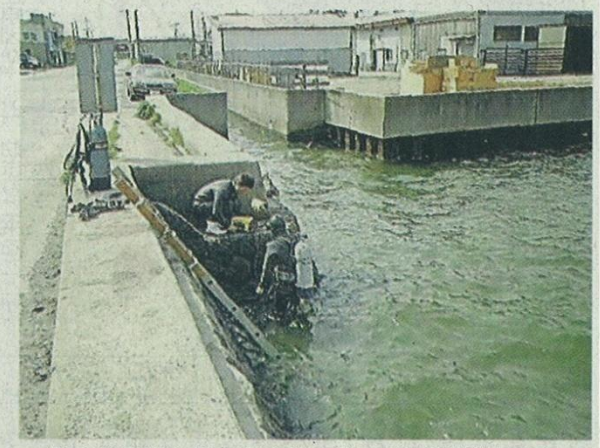
アマモ再生

調査重ねて移植地選定

NPO法人未来(さき)守りネットワークの活動は、2004年6月から本格的に始まります。最初にしたのが中海のアマモ分布調査でした。

半年をかけて現存するアマモ場を調査した結果、アマモ場と呼べる最大の生息地（約10ヘクタール）は境港市外江町の沿岸部にしかありませんでした。ほかには森山堤防の一部と境水道の島根半島側に、50～70平方メートル程度しか確認できなかったのです。

中海は、干拓事業や家庭排水・農業排水の影響で水質が悪化し、浅場ではくぼ地から貧酸素水が押し寄せ、湖底生物が生存できないように思えたのです。正直に申しますが、中海でアマモ再生が本当にできるかどうか不安でした。



清水港で湖底調査するダイバー。潮の動きや塩分濃度からアマモ再生に最適な場所と分かった

技術顧問でもある港湾会社の技術者とともに、アマモが再生できる場所選びとして、初夏から翌年の春にかけて潮の動きや塩分の測定を定期的に行い、ようやくアマモの移植候補地が決まりました。

それが境水道にある元貯木場として使用されていた清水港です。この港は米川水路から分かれた用水路（枕川）の河口で、砂泥が運ばれ、自然に浅場が形成された場所でした。海水と淡水が適度に混ざり合うアマモの移植・再生に最適な場所だったのです。

候補地が決まりアマモ移植準備も整ったところで、行政機関や漁協関係者の承諾と協力を受け、05年6月にアマモの種子採取を行いました。

アマモ再生事業に積極的に取り組んでいただいたのが、現在の県漁協組合長である景山一夫氏でした。

景山組合長は当時から、アマモが魚介類の産卵場や育成場として重要な役目をしていることを認識しておられました。一部のアサリ漁業者からアマモ移植に反対されましたが、中海のアマモが増えることで美保湾の魚介類再生につながり、中海の水質浄化が進めば漁師にもメリットがあると説得してくださいました。

もし景山組合長のお力添えがなければ、中海のアマモ再生は頓挫していたかもしれません。現在でも未来守りネットワークの顧問として引き続きご協力をいただいており、大変感謝しています。

（未来守りネットワーク理事長・奥森隆夫）

山陰中央新報　平成23年6月12日掲載